かたい本が売れない——大学出版局に期待すること

笠原敏雄（心理療法家・心の研究室）

一〇年以上前から、いわゆる〝かたい本〟が売れなくなっている。その原因については、既にいくつかの推測が行なわれてきたし、その一部に基づく試みもある（たとえば、持谷、二〇〇九年）。本稿では、まず、これまでの視点とは少々異なった角度から、この問題を検討してみたい。

現代が、歴史的に見て大変動の時代であることについては、今や誰もが、多かれ少なかれ体感していることであろう。その変化は、よく言われる〝道徳の崩壊〟や政治的、経済的瓦解ないし破綻などの、一見すると悪い方向への変化ばかりでもなければ、心理的、社会的側面の変化ばかりでもない。興味深い一例としては、生活様式の欧風化や全体的な都市化によるものかどうかはともかく、日本人の容姿さえ、旧世代と今の若者たちの世代とでは、事実としてかなり違ってきていることがあげられる。ふしぎなことに、全体として見栄えのよい方向に変化しているのである。

こうした急激な変化をもたらしている根本的原因を突き止めることは事実上できないが、何ごとも全体の中の部分であるのなら、すべてについて全体的、構造的にとらえなければならず、したがって、かたい本が読まれなくなったという現象についても、より広い視野に立って、大きな変化の一局面として眺める必要があるのではなかろうか。

〝知識〟の周辺で現実に起こっていること

数年前のことになるが、使われた形跡のほとんどなさそうな、全三〇巻近い大百科事典が、近所の資源ごみ置き場に整然と積まれているのを目にしたことがある。この驚愕（あるいは驚嘆）すべき出来事は、この三、四〇年の間に起こった大変動を端的に物語っている。

今の若い人たちには信じがたいことであろうが、一九七〇年頃までは、読めもしない英文の大百科事典を、セールスマンの甘言に乗ずる形で、何カ月分かの給料をはたいて購入し、床の間に並べて悦に入っていた人たちが実

際にいた。当時はそれが、特に外国語百科事典の意図せざる〝用途〟のひとつになっていたのである。団塊の世代と呼ばれる私たちが学生生活を送った、その六〇年代末頃の大学生たちは、教科書や教養書をむき出しのまま抱えて街を闊歩していた。岩波書店が刊行した全一八巻の哲学講座の各巻が数万部ずつ売れた（大塚、二〇〇六年、二九ページ）のも、この頃のことであった。実際に読む読まないは別にして、当時はまだ、そうした行動が自慢の種になりえたわけであるが、〝教養主義〟が崩壊した今、もしそのようなことをすれば、時代錯誤的な愚かしい行動にしか映らない。

その後、百科事典の重心は、冊子版からCD―ROM版やDVD版へと移行するかに見えた。ところが現在では、有力な出版社のほとんどが、そうした電子版からも手を引いてしまっている（朝日新聞、二〇一〇年三月三一日夕刊）。信頼性の低いことを多かれ少なかれ承知しながら、ウエッブの無料百科事典などですませてしまう人たちが増えたことも、その一因なのかもしれない。知識に対する憧れは、このような変化と並行して、ほとんど消えうせてしまった。時代の必然の流れとしての、知識の凋落現象である。このような流れに、後戻りはない。しかしながらこれは、人間の退歩どころか、大きな進歩と考えるべき現象なのである。

したがって、冊子版の百科事典が処分されるようになったのは、所蔵スペースが確保できなくなったためというよりは、知識というものの受け取りかたが、根本から変わってきた結果なのであろう。かつて西洋では、写真術の登場によって、多くの肖像画家が仕事を失ったというが、知識の切り売りで命脈を保ってきた少なからぬ知識人たちは、その時のように、本来あるべき競争への参加を余儀なくされ、その生存が危ぶまれる状況に陥ったのである。

出版をめぐる状況の中で起こっていること

かつては、三千部以上売れたら本ではない、などというシニカルな発言をする書籍編集者もいた。〝出版不況〟以前には、全体として本が売れていたので、このような放言も看過される余地があった。ところが、そうした状況は、一〇年ほど前に一変してしまう。ある編集者の言葉を借りれば、「昔は『売れる本を出そう』と言ったら『バカなことを言うな』と一蹴されていたのに、最近では、『いい本を出そう』と言うと、『何を寝ぼけたことを言ってるんだ』とやはり一蹴される」状況になったのである。一九二〇年代以来、「産業としての出版とパブリックな文化の担い手としての出版が、ある程度まで合致して営まれ」るという僥倖的状況が続いてきたが、この夢のような結合は、今やほとんど解消され（吉見、室・中俣編、二〇〇〇年、一五ページ）、硬派出版社は、わが国に限らず、少数派読者の知的必要に応える能力を、急速に失いつつあるのである（津野、室・中俣編、二〇〇〇年、一一〇ページ）。

出版社には、文化の担い手という重要な社会的使命があ

ると言われてきたにもかかわらず、かたい本が読まれなくなったということは、出版社からそうした使命が大幅に剥奪されてしまったことの現われにほかならない。

それでいながら、出版点数自体は減るどころではない。多くの出版社が、初版部数を落とす代わりに、発行点数を増やすという戦略をとったからである。一九九五年に急増した発行点数は、最近では年間八万点に迫るまでになっている。その結果として、どのようなことが起こったか。

まず、必然的に一点の編集作業にあまり時間がかけられなくなったため、硬派の出版社が出す本にも、さまざまなほころびが見えるようになった。拙劣な編集の著書や、誤訳や不適訳に満ちあふれた翻訳書が、一流とされる出版社から出されたものの中にさえ、珍しくなくなったのである。また、売れる（と営業部が想定した）本ばかりが優先され、出したい本の企画が通らなくなったため、編集という仕事に魅力を感じなくなったとして、転職してしまう編集者も出てきている。編集者や校正者という専門家たちによるチェックが入らないウェッブ上の発信と違って、信頼性の高いことでこそ存在意義のあった書籍出版の世界は、経営的側面からばかりでなく、このような意味でも、今まさに危機的な状況に置かれているのである。

かたい本が読まれなくなった理由を考える

現在、世の中で起こりつつある変化の根本を見ると、特に先進諸国で顕著であるが、権威に対する無条件の従属という、旧来の人間に本能的とも言えるほど根強く見られた特性が、相当に薄れてきたことと、有史以来初めて、生活のためにとられる時間が大幅に減少し、余暇が圧倒的に増えたことのふたつがある。では、これらの変化は、読書に、どのような影響を及ぼしているであろうか。

前者の変化からすると、読者は、〝識者〟の評価などにとらわれることなく、自分が本当に読みたい本を自由に選ぶ方向へ進むはずであるし、後者からすれば、それこそ、余暇を十分に活用して、読みたい本を存分に読むという方向に進むはずである。では、実際にそのような帰結になっているかと言えば、この順境をまさに謳歌している少数の先覚者的精鋭を別にすると、事実は正反対のように見える。

余暇が増えたことについては説明の必要もないが、ここで、前者の変化について少々補足しておくと、外部からの暗黙の規制や誘惑（ベルクソンの言う「閉じた道徳」）にとらわれることが、加速度的に少なくなり、それに代わって、個人の意志や自発性の表出が求められるようになったということである。しかしながら、いわば積年の呪縛から解放されたことで、かえってとまどっている人たちがほとんどのように見える。かつての外的規範が維持された状況であれば、〝荒れる成人式〟にしても〝学級崩壊〟にしても、起こりようがなかった。まだまだ緒についたばかりとはいえ、この変化は、人間の本性という点からすると、きわめ

て重大なものと言わざるをえない。ここで問題になるのは、先の〝とまどい〟の本質である。

誰もが意外に感じることであろうが、人間の行動の中で、おそらく最も難しいのは、(1)自分が心底から望むことを、(2)時間の余裕がある時に、(3)自分から進んで行なう、という三条件がそろった時である。そして、その先にある幸福感が大きければ大きいほど、一般にその行動は難しくなる。逆に、それらの条件がはずれるにつれて、まさに呪縛が解けるかのように、行動は容易になる。

自分のためになる行動であればあるほど、それを、苦痛なものという思い込みを作って避け、時間つぶし的な行動に逃げてしまうことが多い。〝現実からの逃避〟と言われる現象である。自分でも何とかしなければならないことを重々承知しているにもかかわらず、いわば内なる悪魔の誘惑に負け、自分の体が意識のいうことをきかなくなるのである。ついでながら、この種の現象を、脳の機能によって説明するのは、問題を不明瞭化する以外の何ものでもない。

かくして、権威から自由になったはよいが、あり余った時間をつぶさなければならないためもあって、刹那的な楽しみにふける人たちが増えた結果、娯楽産業は空前の繁栄を遂げている。昨今の書籍の突出したベストセラーは、こうした脈絡でとらえるべき現象なのであろう。

自分にとっての真の幸福を避けようとして刹那的な楽しみに走ることを、聖書では、「滅びに通じる門は広く、その道も広々として、そこから入る者が多い」と的確に表現している。再びベルクソンの言葉を使えば、これからの時代には、自分の中にある「開いた道徳」の発現が要請されることになるが、人間の意識から見ると、幸福に至るその道は、まさに、いばらの繁茂する細道なのである。

次に、誰であれ経験的に承知していることであろうが、時間というものは、特に用事のない休日を考えればわかるように、長ければ長いほど、怠惰に過ごしてしまう傾向が強い（ここでその理由を説明する余裕はないので、関心のある方は、拙著〔笠原、二〇〇四年〕を参照されたい）。そうするとここに、読書に関するひとつの原則のようなものが浮かび上がってくる。つまり、例外的な精鋭的読者を除くと、**時間の余裕があればあるほど、〝頭を使わない〟、より娯楽的なものが好まれ、〝かたい本〟は避けられる**、ということである。

加えて、同じ行動であっても、それを自発的に行なう場合には、外部から要求された場合と比べて格段に難しくなる。わかりやすい実例としては、部屋の片づけが難しい人たちがあげられよう。友人であれ工事の作業員であれ、誰かを部屋に迎え入れなければならない時には、短時間のうちに手際よく片づけることができるが、自発的に片づけようとすると、同じ片づけでも極端に難しくなるのである。宿題や仕事についても同じことが言える。締め切りがあってすら、間際にならないと手につかない人が圧倒的に多いが、そのような人たちの場合、締め切りがなければ、自分が望んでいても永久にできないであろう。人間は一般に、自発性というものに対する抵抗が極度に強いのである。

以上のように、権威や規範の呪縛から解き放たれつつある現在、自分が本当にしたいことを自由にすることが、いわば隠れた自主規制のために、かえって難しくなっている。ここで、読書に関するもうひとつの原則がはっきりしてくる。それは、**他人との勝ち負けという背景の中で〝教養を身につける〟という虚栄的姿勢から離れ、本当に読みたい本を自由に選べる環境に置かれると、多くの人では、それが（特にかたい本であればさらに）難しくなる**、ということである。

大学出版局に期待すること

したがって、かたい本を読む人が少なくなったのは、二通りの意味で歴史的必然ということになるわけであるが、では、どうすればよいのであろうか。いずれは読者が、オリジナリティの高い、読み応えのある本に戻ってくるはずであるが、それには少々時間がかかることと、以前の数に届かないことは、以上の考察からはっきりしたように思う。問題は、当面どうすればよいのか、ということである。

結論を言えば、この点についての妙案はない。大学出版局が、独立採算制からある程度自由な立場に置かれているとしても、以前より制約は多くなっているはずである。とはいえ、紙媒体の本が電子版に駆逐されることは、少なくとも当分ないので、目先の誘惑に負けて水準を落とすことのないように留意しつつ、歯を食いしばってでも、かたい本の出版を従前通り続けてほしいということに尽きる。

参考文献

大塚信一（二〇〇六年）『理想の出版を求めて』トランスビュー

笠原敏雄（二〇〇四年）『幸福否定の構造』春秋社

佐伯かおる（二〇〇九年）「電子化への移行期に本に期待すること」『大学出版』第81号、一七―二一ページ

室謙二・中俣暁生編（二〇〇〇年）『人はなぜ本を読まなくなったのか？』トランスアート

持谷寿夫（二〇〇九年）「〈書物復権〉の試み」『大学出版』第80号、一〇―一四ページ